



女帝の執念の象徴「下つ道」

西暦710年、現在の奈良県橿原市にあった藤原京から平城京に遷都された。2010年には「平城京遷都1300年祭」が開催され、多くの参加者を集めて成功裏

に終了した。藤原京を造営したのは持統天皇（女帝）である。持統帝は天智天皇の娘であるが、当時は随分血の濃い婚姻が行われており、持統帝の夫は

天智帝の弟の天武帝である。669年の壬申の乱に勝利した天武帝は、飛鳥浄御原宮を都として兵制を整えたり、律令を編纂したりして、統一国家の形成に大きく寄与し

たが、685年逝去した。大勢の皇子のなかから、天皇の座を確実にしたのは持統皇后の息子草壁皇子だが、即位寸前の689年、わずか28歳で逝去。なんとしても草壁の息子（持統の孫）の軽皇子（当時7歳）に引き継ぐことを決意した持統は、自ら中継ぎとして即位

し、藤原京を造営したのである。軽皇子はまだ少年であったが697年、持統帝は譲位して文武帝が誕生した。しかし、文武帝も25歳で亡くなると、天智帝の娘で草壁の妃でもある文武帝の母の安倍皇女が、またまた女帝として即位。平城京遷都を行っ

た元明帝である。文武帝には将来東大寺を建立し、大仏を造営することとなる首皇子（後の聖武帝）が生まれていたが、元正女帝を経て、ついに元明帝と藤原不比等の孫にあたる聖武帝の時代がくる。持統帝から続く孫への政権委譲をより確かなものにする

ため、平城京は藤原京の拡大延長でなければならなかった。平城京のメインストリート朱雀大路は、藤原京の西端線の延長線にぴたりとあたるといわれる。この道こそが藤原京と平城京を結ぶ「へその緒」であり、持統・元明女帝の執念の象徴なのである。